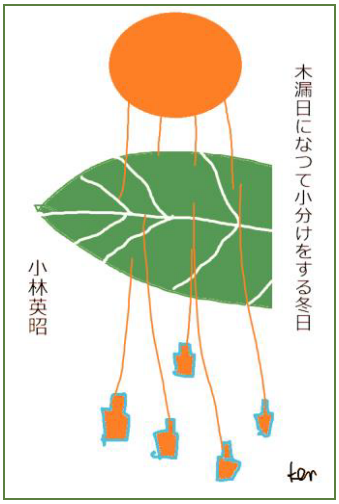
■今月の特選句

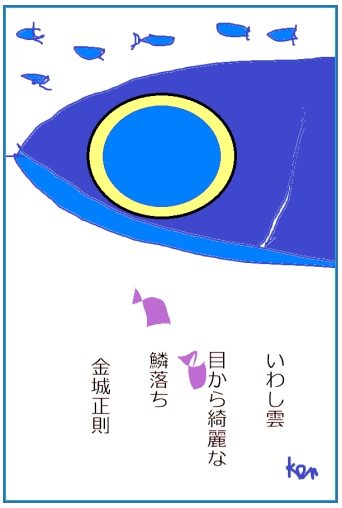
2021年1月



木漏日になつて小分けをする冬日

小林英昭

優れた作品には驚かされる。発想や表現に見たことのない斬新さと詩がある。「木洩れ日」が「冬日の小分け」したものとは感動した。



いわし雲目から綺麗な鱗落ち

金城正則

「眼から鱗」という表現をうまく使いましたね。語源は聖書の中の故事にあるそうな。今は日本語の中にすっかり馴染んでいるね。

あらばしり一言居士がしゃしゃり出る

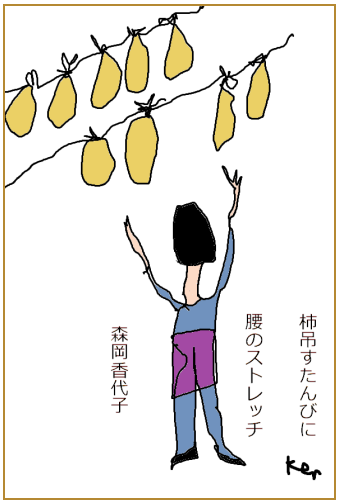
青木輝子

「新走」は新酒のことで、秋の収穫が終わりその新米で早速に作った酒のこと。もっともらしきひと事を聞いてからやっと新酒を飲むことに。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の特選句

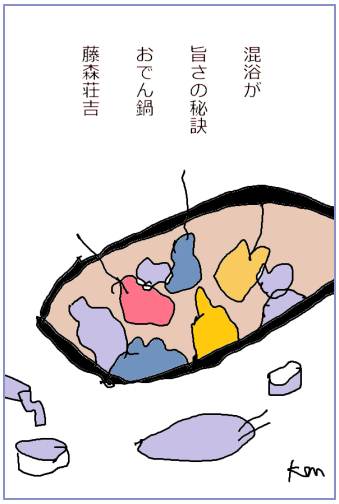
2021年1月



柿吊すたんびに腰のストレッチ

森岡香代子

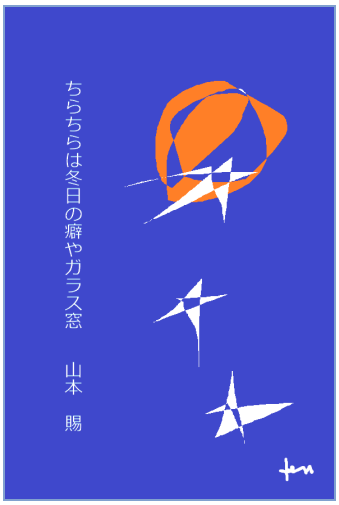
人間の体は不思議なもの。柿を吊るしたら腰痛が治癒。事実なら吊るし柿効果として学会で発表せにゃいかん。貧乏ゆすりで膝痛改善とかも。



混浴が旨さの秘訣おでん鍋

藤森荘吉

混浴が旨さの秘訣だったとは知らなんだ。混浴の後、ぼたん鍋では猪突猛進になり、さくら鍋では蹴飛ばされてしまうかも。



ちらちらは冬日の癖やガラス窓

山本　賜

冬の日を擬人化するという難しい技法ですな。美しいプラスの景を「ちらちらさせる癖」としてマイナス表現にしたのも実に巧みである。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の秀逸句　（・・・七七をつけてみました）

太陽が早引きをして短日に　稲葉純子
・・・実はその朝遅刻もしてる

初詣来世の命前借りし　柳　紅生
・・・百歳まではずぶとく生きる

ふはふはのものを並べて冬支度　日根野聖子
・・・ふはふはしててできたんですか

達磨忌や転んで起きる気力なく　伊藤浩睦
・・・選挙に使うこともなくなり

日向ぼこ夫婦の会話かみ合はず　村山好昭
・・・ズレているから夫婦円満

何もかも怠ける冬の始まりぬ　赤瀬川至安
・・・先祖は小原庄助さんか

来客に電話餅まで膨らみて　月城花風
・・・早くしてよとみんないらいら

不機嫌なラジオを叩く寒夜かな　柳村光寛
・・・真空管の頃が懐かし

鼻歌のやうにやはらか吊し柿　小笠原満喜恵
・・・ひとつだけよと盗み食ひして

大根が太る音する雨のち晴れ　鈴木和枝
・・・葉つぱの緑色を濃くして

冬のぬくみマスクのなかにほのとある　大林和代
・・・安心感も内包してる

耳重宝メガネエンピツマスク掛け　相原共良
・・・メガネは鼻がお手伝いして

仏手柑手袋着けてやりたいな　土屋泰山
・・・その優しさにご利益あらむ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の滑稽句

＊今月の特選句･秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

色葉とてそのお終ひは素つ裸	相原共良
小春日の野良猫指定席にかな	相原共良
生身魂役立つものはマネーのみ	青木輝子
三代の賑わう下足御慶かな	青木輝子
立冬や歩き出すときあちこち変	赤瀬川至安
われは歯科妻は脳外科冬に入る	赤瀬川至安
時節柄自粛しますか神の旅	荒井　類
マスクして捕手ならさらにマスクする	荒井　類
社会的距離冬鷺が蝶に見ゆ	荒井　類
焼芋を包む英字の新聞よ	井口夏子
今を生きコロナコロナの年暮るる	井口夏子
散りいそぐものに山茶花人もまた	井口夏子
宇宙旅行地球を廻る金魚鉢	池田亮二
秋静か猫も逃げだすヴァイオリン	池田亮二
長き夜のライン終には長電話	石塚柚彩
熊よけにひとつの柿も残さじと	石塚柚彩
不意打ちのくしゃみとおなら冬のヨガ	石塚柚彩
禅寺にラマダン始まるクリスマス	伊藤浩睦
神無月叩けば引っ込む鉋（かんな）の刃	伊藤浩睦
老人の大志抱かずとろろ汁	稲沢進一
フランスへ行くことはなしラ･フランス	稲沢進一
花サボテン針を隠して美しく	稲沢進一
焼鳥の食べた分だけ串残る	稲葉純子
大焚火炎は闇を食べ尽くす	稲葉純子
大嘘人驚かす美人かな	井野ひろみ
熱燗は妻の酌なり高血圧	井野ひろみ
無農薬檸檬（れもん）をひとつ手にもらふ	上山美穂
血圧に驚くメニュー冬の夜	上山美穂
烏の糞の抽象絵画冬ざるる	上山美穂
古ばんてん小春日の母の背に	梅野光子
コーヒー好きの夫おらずして秋の夜	梅野光子
冬のバス朝のあいさつ大き声	梅野光子
山賊も世話になりたる兎罠	遠藤真太郎
雪女郎ゲノムゾンビの日本版	遠藤真太郎
令和三年リモートの初詣	遠藤真太郎
朝の月よべのひかりを雲うばふ	大林和代
パークトレイン小春の旅は二十分	大林和代

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事･写真･イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写･転載等を禁じます。

幼な児と目で笑ひ合ふ年の暮	小笠原満喜恵
コロナ禍のヌーボ解禁栓を抜く	小笠原満喜恵
小花をわたる冬蜂の尻重し	岡田廣江
まつすぐに掛け明日からの初暦	岡田廣江
せつかくの鰶(このしろ)嫌ひ関西人	岡田廣江
冬木立絵本に暮らすねずみかな	奥村和岐
日向ぼこミントのガムの行方かな	奥村和岐
親しき人久しき人や年賀状	奥村和岐
ダイソーで手袋を買ひいざ遍路	金城正則
勤労感謝の日に勤労自慢	金城正則
女郎蜘蛛網の穴より人をみる	久我正明
掘炬燵嫌いな足を遠ざける	久我正明
ラ・フランス寝かされる日々七五三	久我正明
小春風モザイク柄のガウディ風	工藤泰子
枯葉降る最後通牒ならざるも	工藤泰子
常態の外出規制神の旅	工藤泰子
テロメアの長さを測る夜長かな	桑田愛子
お薬はザラメザラザラ日向ぼこ	桑田愛子
中吊りはのっぺらぼうや冬のバス	桑田愛子
紙懐炉あらぬところに行きたがる	小林英昭
きぬぎぬは冷めて湯婆(たんぽ)に三行半	小林英昭
コロナ禍や師走を更にざわめかせ	佐野萬里子
ただでさへ忙しき師走なぜGoTo	佐野萬里子
はやぶさ2りゆうぐうよりの贈り物	佐野萬里子
昼の顔ロッカーに預くハロウィーン	壽命秀次
秋風や乳房ブラブラ牧の山羊	壽命秀次
間引菜を抱へいそいそお茶に行く	壽命秀次
あれこれとダメの駄目押し文化の日	白井道義
大いなる空に三密いわし雲	白井道義
テレワーク太りや勤労感謝の日	白井道義
小さめのマスクの下の二枚舌	鈴鹿洋子
稲架日和まはりはソーラーパネルへと	鈴鹿洋子
子どもの頃冬至の南瓜崇めてた	鈴木和枝
目標はいつもコオロギ早い日暮れ	鈴木和枝
松の枝少し難有り師走市	髙田敏男
半鐘は八百屋お七か火事見舞	髙田敏男
冬将軍八百八町通りぬけ	髙田敏男

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

水の星呉越同舟コロナ冬	高橋きのこ
マスクして朝も夕べも同じ顔	高橋きのこ
黒眼鏡黒マスク付け正社員	高橋きのこ
福笑ひしくじりにけり整形医	竹下和宏
レンジの火嫌ひとふくれ鏡餅	竹下和宏
銀杏の転げて可笑し六十歳	龍田珠美
うどん食う腰無し味無し葱も無し	龍田珠美
小春日や嫁ぐ思いに揺るぎなし	龍田珠美
馬鹿どもに教へをけちる文化の日	田中　勇
石垣を枯蟷螂の登りけり	田中　勇
ほんのりの恋心抱く小春かな	田中　勇
夏過ぎても頭の中の蝉は鳴く	田中早苗
役終えし案山子は脊椎炎を病む	田中早苗
人から人冬のウイルス浮気好き	田中早苗
山茶花の散るはらはらは涙とも	田中晴美
ぬくぬくと三密無縁の日向ぼこ	田中晴美
着膨れの後ろ姿をさらすかな	田中晴美
ドーナッツひとつの幸せ冬籠り	谷本　宴
バイデンがトランプ占い年の暮	谷本　宴
忘れずにマスクの下は微笑みを	谷本　宴
部会写真マスクに名前書いて撮る	田村米生
コロナの世マスクして寝る夫婦かな	田村米生
コロナ禍や閑古鳥鳴く寒紅屋	田村米生
大根の丸き背をかく鬼おろし	月城花風
歳暮には断酒誓ひし酒もあり	月城花風
もう少し待てば懐炉のぬくぬくし	土屋泰山
もう一枚毛布被って猫となり	土屋泰山
風邪ひとつ引かずペア密2DK（うさぎごや）	飛田正勝
陽性は三桁コロナの古暦	飛田正勝
旅に逝くことも自粛や冬籠り	飛田正勝
霊峰の肩に重たき冬の雲	長井知則
四つん這い登る手元に犬ふぐり	長井知則
年の瀬や陳列棚の品定め	長井知則
倒立をして立冬の昼下り	西をさむ
凩に切札飛んでUSA	西をさむ
山裾の畑で遊ぶや小春たち	西をさむ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

脱コロナ願いリモート忘年会	花岡直樹
三密を避けてサンタも宅配便	花岡直樹
絶品も風評被害コロナビール	花岡直樹
さざれ石幣に動けず冬に入る	久松久子
冷まじや後ろの正面閻魔堂	久松久子
冬至南瓜包丁刺したままにされ	久松久子
冬立つや筋肉質の脚をして	日根野聖子
太古よりGoTo出雲神の旅	日根野聖子
コロナ禍の枯葉ころころ遊ぶかな	廣田弘子
手をあはせなにかを祈る枯蟷螂	廣田弘子
空は茜に秋あかね飛びかへば	廣田弘子
木枯と日の温もりとウイルスと	藤森荘吉
ひと声もふた声も鶴高く鳴く	藤森荘吉
温暖化冬眠忘れた熊の日々	細川岩男
鰭酒や通を気取ってちびちびり	細川岩男
息すればコロナ漂う師走かな	細川岩男
転生を信ず信ぜず牡丹鍋	峰崎成規
禍と福に禍のやや多き年の暮	峰崎成規
除夜に焚く火勢は厄の断末魔	峰崎成規
どうみても空には飛べぬインバネス	椋本望生
ときどきはマスクをずらし鰓呼吸	椋本望生
カーテンと押し競饅頭する子かな	椋本望生
ハロウィンを封じ込めたりコロナの禍	村松道夫
トランプのいら立つてをり破蓮	村松道夫
仏教徒讃美歌唄ふクリスマス	村松道夫
見比べて片方戻す蜜柑かな	村山好昭
古稀いまだ若き部類や初句会	村山好昭
帰り花今が昔にならぬうち	百千草
極月やマスクの下の薄化粧	百千草
床の間の広くなりたる鏡餅	百千草
霜柱自滅の道を選びたる	森岡香代子
ぷかぷかと私も柚子の仲間入り	森岡香代子
眼鏡はずして風呂吹を食ふ一家族	八木　健
冬夕焼濃すぎてなにか起きさうな	八木　健
毛糸編む人の背中に耳がある	八木　健
セーターに蓄電できるほどの夜	八塚一青
食卓に見慣れぬハムの歳暮かな	八塚一青

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

パチンコに向かう途中の社会鍋	八塚一青
雪女郎お色直しも真白なり	柳　紅生
切れ者の剃刀負けや御慶述ぶ	柳　紅生
雀五羽左右チュンチュク秋の夕	柳澤京子
遊歩道突如突風落紅葉	柳澤京子
秋の夕尻尾振りふり散歩犬	柳澤京子
真っ先にボーナス貰う公務員	柳村光寛
徒長枝のめざす所に冬の虹	柳村光寛
「ま」と入力すればマスクの絵文字出る	山内　更
日記買う忘れずエタノールも買う	山内　更
鱈腹のおくび赤子の冬うらら	山内　更
電線にならぶ音符の寒雀	山岡純子
水彩の絵の具に塗られた秋の空	山岡純子
12月8日にうたうイマジンや	山岡純子
喉のガラガラ炬燵のうたた寝は	山下正純
白息吐く蒸気機関車になりしごと	山下正純
白帽被りて初雪知らせたり	山下正純
神無月怪我にもクジにも大当たり	山田真佐子
ライトアップされる紅葉が色競ふ	山田真佐子
除夜の鐘打つコロナ菌飛んでけと	山田真佐子
里芋の違いが分る女かな	山本　賜
銀杏散るみな大人しく空を見て	山本　賜
お屠蘇にも酔ふてふ下戸の寝正月	横山洋子
赤熟のせんりょう一夜に丸坊主	横山洋子
たれそかれ黄昏を行くマスク族	横山洋子
薄の穂踊るや風を予感して	吉川正紀子
千枚もなけれどこれは千枚漬	吉川正紀子
草紅葉岩の割れ目を飾りたる	吉川正紀子
マスクして笑い転げるバカ話	吉原瑞雲
雨傘とマスクは大きい方がいい	吉原瑞雲
咲ききらず生々残るさくらの芽	吉原瑞雲
クリスマスケーキまづ仏壇に供へられ	渡部美香
ぶかぶかのユニフォームの子おでん食ぶ	渡部美香
郁子（むべ）の実の種の数多やむごむごと	和田のり子
通（かよい）下げ一人前の陶狸	和田のり子
若の真似したくて繋ぐ老の秋	和田のり子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。